

美術館と高等学校による共同指導の実践報告

一高校生学芸員による展覧会 「ぼくらの視点×あなたの出会い」を終えて―

本丸 生野

はじめに

1. 姫路市立美術館と学校との交流状況
2. 高校生学芸員による展覧会の実施にむけて
3. 指導のプランと授業内容
4. 展示構成について
5. 高校生学芸員の感想より
6. アンケート集計結果

むすび

はじめに

平成21年10月14日より3日間、「第46回全国高等学校美術、工芸教育研究大会」<2009兵庫大会>が本市において開催され、高等学校教育に携わる教師・研究者が全国から来姫した。この研究大会の特別企画展として、高校生学芸員による展覧会の開催が決まり、当館は協力者として企画実施に参加した。高等学校との共同展事業は全国的にも例が少ない。そのため本稿では、この展覧会の企画から開催、反響等について記録するとともにその意義を検証したい。また、今後の学校との連携の可能性についても考えてみたい。

1. 姫路市立美術館と学校との交流状況

本題に入る前に、当館の状況、殊に学校との交流状況を述べておきたい。

当館が学校との連携事業を開始したのは平成6年頃にさかのぼる。ここでいう連携事業とは、学校単位で単に美術館を利用する、美術館から情報を得るというものではなく「美術館職員と学校教職員の交流により実施する教育事業」である。どのような連携事業を実施してきたかについて以下に分類（4つ）し、各々の状況を記しておきたい。

(1)美術館と学校との共同プロジェクト (2)美術館行事に学校が参加 (3)学校行事に美術館職員が関わる (4)指導者向けのPR活動

(1)は美術館職員と学校教職員が共同企画して実施するもので、平成6年の「子どもアートフェスティバル」やこのたび報告する「高校生学芸員による展覧会」がそれにあたるが、その他小規模なものでは、近郊の小学校の教諭とのワークショップの共同実施や、近隣小学校の学童保育員と企画実施した鑑賞プログラムなどがある。相互の目的や方法論のすり合わせに労力を伴うものだが、美術館と学校教職員それぞれのノウハウの共有による相乗効果が期待できる。(2)は美術館が学校に事前に参加を呼びかけて行事を実施主催するもので、20年以上続けている恒例イベント「美術館に鯉のぼりをあげよう」がある。このほか、各種展覧会への団体鑑賞の受け入れもこのカテゴリに入れることができよう。(3)は学校側の主催実施する行事（授業を含む）に美術館職員を派遣（もしくは生徒が来館）し実施する普及事業である。平成9年頃から15年まで行った「出前美術館」や姫路市内の中学校生徒が職業体験をする「トライやるウィーク」の受け入れ、高校生を対象とした「イン

ターンシップ」がそれにあたる。「出前美術館」は美術館職員が市内の小学校や幼稚園からの依頼を受け鑑賞・造形指導を行うというものであった。のちに館内での鑑賞教育（展覧会毎の子ども鑑賞イベントの実施など）を充実化する方向への転換が図られて平成16年に「出前美術館」は終了となった。ただし、(1)の美術館と学校との共同プロジェクトの実施に関連して学校教育現場に館職員が出向くこともあるため、形を変えて「出前美術館」的な取り組みが存続しているという事もできよう。(4)は学校教職員へのPR活動である。たとえば中学校教育研究会美術科部会など学校教諭の会合の際に「鑑賞教育に美術館を活用しませんか」という文書を配布し利用方法を説明するといったものである。この活動は課外学習や部活動での団体鑑賞の利用率アップには貢献しているようだが、クラス単位、学校単位での動員には繋がっていない。学校が授業で美術館を利用するためには授業時間、交通手段、費用等の面での環境整備が必要であり、学校教育の現場で美術作品に直に向き合う機会を提供する方法については、課題となっている。

次に、連携の頻度の比較であるが、幼稚園から高等学校までのうち、団体鑑賞での利用が最も多いのは小学校と中学校である。「出前美術館」は幼稚園、小学校が多く、鑑賞とワークショップを組み合わせたプログラム実施は小学校が最も多い。高等学校については、去年度までは前述のインターンシップと団体鑑賞での連携があるものの、小・中学校に比較して頻度は低いうえ、企画時点での積極的交流はさほど行われていなかった。今回述べる事業（高等学校との教育事業の共同実施）は当館にとって未開拓の分野に属するものであり、それだけに実験的であった。

2. 高校生学芸員による展覧会の実施にむけて

次に、展覧会の概要と企画に至った経緯を記しておきたい。

展覧会の名称は「はくらの視点×あなたの出会い ―高校生学芸員による展覧会―」であり、平成21年10月14日～17日の4日間、市民ギャラリー特別展示室（イーグレひめじ内）で開催した。展示作品は12点で、すべて当館の所蔵品である（出品作品は「4. 展示構成」参照）。

本展はさきに触れたとおり全国高等学校美術・工芸教育研究大会〈2009兵庫大会〉の特別企画展として開催されたものである。同大会の姫路での開催に際し、関連事業として美術館とのタイアップ事業を行いたいとする大会事務局側の提案から始まった。提案当初の青写真は、当館の展示室において高校生が企画した館蔵品展覧会を開催するというものであった。その趣旨を踏まえた上で協議を重ね、会場の貸出の可否や協力方針その他もろもろの条件に折り合いつけ現実的な方向を探った結果、市民ギャラリーにおける小規模な館蔵品展の形で実現させることで一致した。比較的頻度の低かった高校生対象の普及事業に新たな展開を図りたいという当館側の思惑は、“授業の先進的なスタイルを提示し、高校教育の可能性を拡大したい”という大会事務局側のベクトルと一致し、協力体制がつけられた。

発案者は同大会の研究部長の浅野吉英教諭（兵庫県立西宮今津高等学校教諭）と同大会実行委員長の前野フキ教諭（兵庫県立香寺高等学校教諭）であった。そこに姫路市立姫路高等学校の前野フキ教諭が実動主体として加わり、展覧会の会場、運営方法、予算が大まかに決定するまで、美術館側の担当学芸員・本丸を含めた4名を中心に協議を行った。協議によって決定した主な事項は以下のとおり。

- ・展覧会の会期、会場
- ・展覧会の実施形態：姫路市立姫路高等学校の生徒が授業の中で学芸員として展覧会を企画、実施。
- ・展示作品：すべて姫路市立美術館の所蔵作品
- ・展示作品の調達方法：姫路市立美術館条例施行規則による貸出
- ・本事業における美術館の立場：協力者
- ・経費：ディスプレイ、展示等にかかわる一切を大会事務局側が負担

- ・広報：予算の範囲で印刷物を作成し配布
- ・その他、保険、作品コンディションチェック、輸送、出品申請の概要等について

これらの決定事項は「第46回全国高等学校美術、工芸研究大会 <2009兵庫大会>における高校生学芸員による企画展覧会について〔覚書〕」（資料1）に明文化して交わし、予算面、実施面双方の基礎的な条件が公認のものとなった。

3. 指導のプランと授業内容

大会事務局と覚書を交わすことにより実動への準備が整い、具体的な指導プランが練られていった。「高校生学芸員」として選ばれたのは姫路市立姫路高等学校の3年生文系の美術Ⅱの選択者全員で、女子が10名、男子は2名であった。発案の時期から数ヶ月で展覧会企画の授業が始まるという過密スケジュールの中、前野教諭が指導計画（資料2）を作成した。指導は4月以降週2時間の授業の中で行われることになり、10月の会期までの半年程度で展覧会準備を終えなければならなかったため、いかに効率よく進めていくかに苦心した。授業の流れは、担当学芸員との協議も経て以下のとおりで決定した。

- ①「展覧会」「作品」そのものについて学ぶ
- ②学芸員の仕事を学ぶ
- ③自分だけの企画書作り
- ④企画展の内容を決定し、趣旨を理解した上での作品選定
- ⑤展覧会タイトルの決定、チラシ案内用のあいさつ文の作成
- ⑥作品解説、展示図、会場模型、チラシ、キャプション・パネル等の作成
- ⑦設営作業立会い
- ⑧総括

当館担当者（学芸員）は、前野教諭と適宜情報交換・協議を行うほか、講義等のため同高校を訪れた。授業はすべて前野教諭の主導で行い、学芸員は、必要に応じて講義を行うという立場で参入した。間接的には全ての授業内容に関わらせてもらったが、授業時間に現場を訪れたのは計5回となる。その他、収蔵庫内での作品選定、展覧会設営作業の立会いを行ったため、直接的に指導に関わったのは7回（(1)～(7)）になる。

- (1) 出張授業1 2009年4月28日
- (2) 出張授業2 2009年5月12日
- (3) 出張授業3 2009年5月14日
- (4) 会場下見、収蔵庫内での作品選定作業 5月28日
- (5) 出張授業4 2009年6月16日
- (6) 展覧会会場設営 2009年10月13日
- (7) 出張授業5 2009年12月10日

次に、上記(1)～(7)各々の実務面の具体的状況を述べていきたい。

(1) 出張授業1 2009年4月28日

美術館の役割、美術館の機能、展覧会の意義、学芸員の仕事についてスライドや冊子を使用して話をした。(写真1)



写真1

(2) 出張授業2 2009年5月12日

「展覧会のつくりかた」と題して手順を説明した後に、自分だけの企画案を作成してもらうというワークショップ形式で行った。生徒が書いた初期段階の「企画書」は当然ながら本人の関心の高いものがベースになっている。高校生学芸員が選んだテーマは以下のようなものだった(「学芸員になって、初期段階の「企画書」をつくってみよう」のキーワードメモより)。

- ・光と陰、明と暗、熱いと冷たい の対比
- ・「涼しさ」の2つの側面 (水の流れ、風の音などの涼しさと、恐ろしさからくる涼しさ)
- ・子供が自分の視点から見る家族や親、親が自分の視点から見る家族や子
- ・宇宙、生きている地球、丸くない星。現代人のアートする地球。ECO
- ・目の錯覚、動きのある作品、人の感覚を利用している作品、だまし絵
- ・抽象的表現の作品。不思議・モダン
- ・自分の現在、過去を見直す
- ・ブラックユーモア、無機質、素朴な美しさ、ゴシック、原色、栄枯盛衰
- ・不思議な絵、だまし絵
- ・身近なものをテーマにした作品、小さな作品、感情や音、形のない物を表現した作品
- ・絵本原画、絵本作家の絵、子どもの成長とか心理の表現
- ・ポップアート、レトロ

実際に企画を進めるにあたって、上記のキーワードから一つを選ぶ、つまり、高校生学芸員の企画書の中からいずれか一つを採用して掘り下げるという方法もあった。しかし、その方法では学芸員としての仕事の疑似体験はできるかもしれないが、出来上がった展覧会は高校生学芸員それぞれがもつ魅力、個性、能力を反映したものになり難いのではないかと懸念があった。単なる疑似体験や職業経験ではない授業を实践したい。それが指導者側の共通見解であった。プロの学芸員では不可能な展覧会、高校生だからこそ可能な展覧会こそ行うべきではないか。ではどんなものが可能なのか？

前野教諭との協議の中で、12枚の企画書に共通するものの存在を見出し、すべての高校生学芸員の自己テーマに通じるものを模索した。

高校生学芸員それぞれが現時点で関心を持つものは、1人ひとり異なる。この中から共通項を見出すとすれば、「自分が関心を持つものを追求する姿勢」、つまり、自己探求心からくるテーマ設定、いったところだろうか。

そこで考えたのは、一般的なテーマ(モチーフや時代、技法など)から離れ、それぞれの高校生学芸員の視点を提示するという展覧会である。つまり、テーマは「高校生の視点」。それを提示する方法についての協議を経て、指導者側の手による「企画書」を作成した。そして5月14日の授業で、指導者作成の「企画書」を配布し、プレゼンテーションを行った。高校生学芸員たちはその「企画書」を熟読し、理解を示した。

プレゼンテーションで高校生学芸員に語った「指導者側の想い」はおおむね以下の内容である。

- ・それぞれの高校生学芸員の視点の面白さを感じたことにより、この企画書が作成された。12名の中から1人の企画書を採用する手もあったが、展覧会企画の本質は、単にテーマを設定して、そのカテゴリに見合った作品を並べることによって実現するという単純なものではない。展覧会は作品を「鑑賞」するためのものであり、それを企画する者が、作品の何をどう見て欲しいか、という視点を提示し、それが鑑賞者の内面とコミットした時に「鑑賞」が成立するものなのだと思う。「鑑賞」が成立した瞬間、鑑賞者の内面には新たな視野が広がってゆく。高校生学芸員の瑞々しい感覚と思考能力は、豊かな体験としての「鑑賞」を実現できる可能性をもっている。その高校生の「鑑賞」体験を第三者—鑑賞者—に表現することで、鑑賞者に新しいビジョンを提供することができるのではないか。

- ・高校生学芸員それぞれが真剣に作品に向き合うためには、かけがえのない1点と出会う必要がある。その「私の一点」と向き合うことで鑑賞が深化することだろう。展覧会のテーマは「自分」と「作品」の間の世界。その「間の世界」を表現するという主体的な自己表現活動により展覧会をつくってゆく。できあがった展覧会は、「自分達でなければできない展覧会」という価値あるものになるだろう。

説明の中で「高校生でなければできない展覧会」と強調したことにより、高校生学芸員の創造性とやる気が刺激されたように思う。そして、授業時間が進むにつれ、自分自身をみつめ、作品に内面を向き合わせる、思考する、といった美術作品を鑑賞する体勢が作られていった。

<参考1：使用したプリント1>

2009年5月12日
企画展の実際
<ol style="list-style-type: none"> 1. モヤモヤ段階 2. 頭の中から「キーワード」を発掘し、抽象的イメージから具体的イメージへ 3. 作品とその所蔵調査とストーリーの組み立て、企画書作成 4. 意思表示、館内協議（内諾を得る） 5. ドリームプラン（作品リスト）の決定と出品交渉（貸出依頼） 6. 予算の確保 7. 写真撮影等図録の準備開始、各種調査 8. イベント決定と広報物の作成（会期5ヶ月前）、企画書（展覧会要項）完成 9. ディスプレイ、輸送等の内容決定・業者決定（会期3～5ヶ月前） 10. グッズの調整（会期2ヶ月前） 11. 記者発表（会期1ヶ月前） 12. 借用→額装 13. 会場設営 14. 輸送 15. 展示 16. オープニング、各種研修など
<p>※会期中はイベント、取材対応、団体解説などがある ※閉会後は作品返却、お礼、会計処理、報告書作成などを行い、記録を残す</p>

<参考3：高校生学芸員に配布した本展の企画案>

<p>「高校生学芸員による展覧会」</p>
<p>どんな作品をならべたいか（漠然としたものでも）書いてみよう。 <small>高校生らしい視点で選んだ作品、見る人が高校生の視点を感じ取れるような作品、多感な世代に属する高校生が自分の心の目で出品を決断した作品</small></p>
<p>上の言葉を別の言葉（キーワード）で表してみよう。 <small>「高校生の視点」「ふたつのビジョン」「私と作品、作品と私」「鑑賞＝創造」「私の1点、私の思い」「1：1 作品との対話」など</small></p>
<p>展覧会を開催する意味について、考えたことを文章にしてみよう。 <small>展覧会企画の授業の中で、それぞれの生徒の「夢のプラン」を考えてもらい、自分の言葉で展覧会企画書を書いてもらった。それらの企画書にはそれぞれの個性が現れ、興味深いものが多かった。（我々指導者は）高校生の「思考力」が結晶となる課程において生じる言葉・それ自体に面白さを感じひたった。“この「思考された言葉の面白さ」を展覧会の形に生かせないか。”そんな思いがはじめにあった。</small> <small>「高校生学芸員による展覧会」という課題において最も重要視すべきは、企画主体が他ならぬ高校生だという点である。「高校生らしさを全面に出したい」という思いは、指導者側の共通意識でもあった。とはいえ、高校生らしさ、とは一体何だろうか。自分の鋭敏な感覚で物事を把握し考えることが得意な時期。抽象的な言い方をすれば、そのようなことになろうか。</small> <small>そこで考えたのが「高校生のナマの目による選定作品」の展覧会である。美術史上の価値や作家の名前で作品を選ぶのではなく、地に足をつけて、自分の目と心（頭）で選ぶのである。</small> <small>テーマは「自分自身にとっての（かけがえない）1点」。それらを自分自身の言葉で解説する。解説は、いわゆる一般的なもの（美術史上のデータによるもの）ではない。「観察・思考の結晶」としての「言葉」である。それを作品と共に大きく提示するという展覧会である。このような展覧会こそ、多感な高校生の本領を発揮できるものなのではないかと考えた。瑞々しい感性と思考力が織り成す「言葉」が、館蔵作品とともに展示された空間は、来館者に新鮮なビジョンを提示し、もう一つのイメージの世界へといざなう翼を提供することだろう。</small></p>
<p>では、具体的に何を展示しますか？ <small>（「高校生学芸員」がこれから吟味して決定）</small></p>
<p>メモ</p> <p><small>展覧会を特色あるものにするため、高校生がそれらの作品を読み解いた文章を記したパネルを設置。さらに、それらのパネルの文章に秘めた「高校生らしさ」に来場者の目を向けるためのしかけとして、もう一つの「解説」（指導者側が作成）もあわせて展示する。こうすることで“作品に対峙した多感な高校生のクリエイティブな心の動き”を示し、“鑑賞”は新しい創造活動そのものである”という事象に気付いてもらえる構成をめざしたい。</small> <small>この展覧会では、一般的な“学芸員の手による解説文”ではタブー視されがちな「個」のスタンスを土俵入りさせる。</small> <small>高校生の文章は一般的な解説文とは明確に異なるものが望ましい。それが個性的であればあるほど、クリエイティブであるからだ。</small></p>

(3) 出張授業 3 2009年5月14日

前載の企画案を高校生学芸員に配布し理解を得たあとで、具体的な作業・作品の荒選定を行った（写真2）。当館から持参した館蔵品図録（9種約25冊）から出品候補作品を選定してもらった。選定作品を記入する用紙として、前野教諭作成の「作品選定候補メモ」のフォーマットを使用した。このフォーマットは、5作品分のタイトル、作者等をメモできるようになっており、最終的にそのうちの任意3点に○を入れることになっている。○をつけた3点について、後日収蔵庫内で実見する予定である。45分間という限られた時間内で荒選定作業を完了させるのは困難だったため、任意で昼休みや放課後を利用して選定を行ってもらい、数日後、原則1人3点



写真2

の実見希望作品リストが完成した（参考4）。

選定作業に先立ち、作品のコンディション確保のため、屏風や軸などの乾燥に弱い作品や展示ケースに入らない大型作品は展示不可である旨を説明した。また、作品の解説文はなるべく読まずに、図版イメージから受ける印象を重視してもらうよう呼びかけた。これは、思考の扉を閉ざさないためである。ことに活字化された印刷物の場合、解説文が絶対的な解釈であると誤解され、それをなぞる形での鑑賞に陥ることがある。これはいわゆる袋小路に入ってしまうことに似ていて、見る力を育てる鑑賞教育を行うには相応しくないと考えたためである。絵画の解釈には知識が必要である、という見解は当然ある意味では肯定すべきであるが、あくまでも見る姿勢、見るという行為自体が鑑賞の出発点なのである。

<参考4：生徒作成の「作品選定候補メモ」の例>

作品選定候補メモ						
展覧会に O/I	作品名	作者	技法(版画・油彩など)	大きさ	出展参考文献等(ページ、図録ナンバー)	
①	○ 1373の白い点	ホーレ・ペーリ	板・ナイロン・モーター	直径103.0cm 厚み28.0cm	館蔵名品展 P123	
②	○ LIFE TO SHARE?	永井一正	シルクスクリーン	103.0x72.8	P12 目録Ⅲ	
③	「リク「マル」の手記」 より、一行の詩の挿入に は、より作者の傍らで	ペン・シャーン	リトグラフ	57.0x45.0	館蔵名品展 P117	
④	○ 無題	吉原治良	水彩	130.5x162.2	P48 日本美術	
⑤	ムーン・スクア	野村仁	写真	28.0x38.0	P13 目録Ⅱ	

作品選定候補メモ						
展覧会に O/I	作品名	作者	技法(版画・油彩など)	大きさ	出展参考文献等(ページ、図録ナンバー)	
①	○ WORK 70-11	小野田 賢	ミクストメディア	91.6 x 91.6cm	所蔵品目録 P38	
②	” 63-A	”	”	91.4 x 91.5cm	”	
③	「作品」	元永定正	油彩	183.5 x 183cm	赤い本 P56	
④	○ 1928年頃、台湾高雄 にて、白いリボンの帽子を 被った感項の母と	望木 絵津子	コンピュータ加工写真	206 x 145cm	コレクションでつくる 札幌市立へ P59	
⑤	○ 淋しい水	河野 通紀	油彩	80.5 x 100.6	” P56	

実見作品の選定

「作品選定候補メモ」を受け、他館への貸出や館内使用予定、展示場所の物理的制限、作品コンディションの良悪などを調査し、美術館内の協議により展示の可否を判断した。実見作品は原則一人2点程度とし、○の記された作品(下に記載の候補作品中、下線のあるもの)を優先とした。実見作品を制限した理由は、①事前に絞ることにより一点一点をじっくり吟味できるようにするため、②作品の安全面の確保を含めた事前準備を行うためである。収蔵庫内にある作品は、作品の取扱

いに慣れた学芸員による事前準備(安全な場所を確保し、そこに開梱して配置するなど)を要する。
 「作品選定候補メモ」に記入された作品は日本作家の作品が40点、海外作家が19点であり、海外作家のうちベルギー作家の作品が17点と高い率を示した。ベルギー作品の一つの特色である神秘性や内面性の高さが高校生学芸員の感受性に刺激を与えたのではないかと思われる。しかしながら、当館のベルギーコレクションは、同時期に他館への貸出がすでに決定していたため、他の作品を展示候補としなければならなかった。

一方、日本作家についても内面性や叙情性に秀でた作家を選ぶ傾向が見られた。浜田知明の作品を候補メモに挙げた生徒は4名、中村忠二は3名、上野長雄は3名、麻田浩は2名であった。また、日本・海外を問わず、現代的な作品も多数選ばれた点も特色であろうか。ポール・ピュエリ、野村仁(2名)、藤原向意、松谷武判、小野田實、菅井汲、吉原治良らの現代的な作品も挙げられた。

「作品選定候補メモ」に記された作品、館内協議ののちに決定した「実見作品一覧」は以下のとおり。

<「作品選定候補メモ」の候補作品(原則1人5点。下線作品は○の記されたもの。)>

- 生徒A 「甲地」藤原向意、「作品63-A-36」松谷武判、「悪い医者」ジェームズ・アンソール、「観光案内人」ルネ・マグリット、「サイコロ」鴨居玲
- 生徒B 「竹に小鳥」野村正、「ウサギ(4)」野村正、「猫」新井完、「鷹(3)」野村正、「白鷺城の一角」小山敬三
- 生徒C 「WORK70-11」小野田實、「1928年頃、台湾高雄にて、白いリボンの帽子を被った4歳頃の母と」笠木絵津子、「淋しい水」河野通紀、「WORK63-A」小野田實、「作品」元永定正
- 生徒D 「日本のかたち」上野長雄、「風刺的詩集」フェリシアン・ロップス、「古い物語」フェリシアン・ロップス、「蓮池」浜田観、「天井画一絵画、音楽、詩歌」フェルナン・クノッフ
- 生徒E 「あそび」上野長雄、「9月16日」ルネ・マグリット、「水に映る太陽」野村仁、「やもりと手」上野長雄、「絵をかく少女」中村忠二
- 生徒F 「悪い医者」ジェームズ・アンソール、「スクランブルC」菅井汲、「取引」浜田知明、「飾窓」上野長雄
- 生徒G 「観光案内人」ルネ・マグリット、「マグリットの捨て子たち XI」ルネ・マグリット、「幕の宮殿」ルネ・マグリット、「夢・家」麻田浩、「マグリットの捨て子たち VII」ルネ・マグリット
- 生徒H 「ピエロの葬送」アンリ・マティス、「サーカス」中村忠二、「副校長D氏像」浜田知明「マグリットの捨て子たち XII」ルネ・マグリット、「(資料)」谷中安規
- 生徒I 「朝の月」森崎伯霊、「横たわるセレーネ」アントワヌ・ブルデル、「日光山」池田遥邨、「初年兵哀歌」浜田知明、「噴水のある風景」中村忠二
- 生徒J 「少女」白瀧幾之助、「花」上村松園、「エッフェル塔」ポール・ピュエリ、「天井画一絵画、音楽、詩歌」フェルナン・クノッフ、「地方名士」浜田知明
- 生徒K 「1373の白い点」ポール・ピュエリ、「LIFE TO SHARE 2」永井一正、「無題」吉原治良、「リルケ『マルテの手記』「一行の詩のためには」より、『死者の傍らで』」ベン・シャーン、「ムーン・スコア」野村仁
- 生徒L 「夜の中庭あるいは陰謀」ドグーヴ・ド・ヌンク、「夢・家」麻田浩、「初年兵哀歌(歩哨)」浜田知明、「廢墟 神戸の教会」藤尾龍四郎

<実見作品一覧>

- 生徒A 「甲地」藤原向意 「作品63-A-36」松谷武判

- 生徒B 「竹に小鳥」「ウサギ(4)」「猫」野村正
 生徒C 「WORK70-11」小野田實、「1928年頃・・・の母と」笠木絵津子
 「淋しい水」河野通紀
 生徒D 「日本のかたち」上野長雄、「蓮池」浜田観
 生徒E 「あそび」上野長雄、「絵をかく少女」中村忠二
 生徒F 「スクランブルC」菅井汲、「取引」浜田知明
 生徒G 「夢・家」麻田浩
 生徒H 「サーカス」中村忠二、「副校長D氏像」浜田知明
 生徒I 「朝の月」森崎伯霊、「横たわるセレーネ」アントワヌ・ブルデル
 生徒J 「少女」白瀧幾之助、「エッフェル塔」ポール・ビュერი
 生徒K 「1373の白い点」ポール・ビュერი、「LIFE TO SHARE 2」永井一正
 「無題」吉原治良
 生徒L 「廃墟 神戸の教会」藤尾龍四郎、「夢・家」麻田浩、
 「初年兵哀歌（歩哨）」浜田知明

(4) 会場下見、収蔵庫内での作品選定作業 5月28日

当館の規則に基づく特別閲覧許可申請書を受け、実見作品確定後の放課後、展覧会場の下見と当館収蔵庫内で作品の実見による最終選定を行った（写真3）。（12名のうち1名（生徒G）は欠席。）実見に際し、材質や形状などのデータを書き込める調査票「決定した作品についての説明書を考えよう」を準備し、主観的な視点だけでなく客観的な視点でも作品を観察できるようにした。同調査票には自由に感想等を記入できるスペースもつくり、印象を記憶にとどめられるように工夫した。当初は約1時間を予定



写真3

していたが、現場での要求に応じ予定外の作品も実見。結局約3時間の大選定鑑賞会となり、それぞれの高校生が、自分の内面を投影させながら作品を鑑賞し、選定していった。高校生学芸員が展覧会終了後に綴った感想を読むと、この選定鑑賞会により、高校生学芸員の中でそれぞれの展覧会像がリアリティを帯び、高校生学芸員としての意識が格段に高められた様子がわかる（「5. 高校生学芸員の感想より」参照）。

興味深いのは、実見予定作品の中から作品を選んだ生徒より、候補に上げていなかった作品を最終的な展示作品に選んだ生徒の方が多かったことである（12名中、実見予定作品に含まれる作品を選んだ生徒は4名のみ）。荒選定に使用した資料の図版が小さかったためという理由もあるが、複製物には再現し得ない作品そのものの物質感、マチエールなどの皮膚感覚を伴う鑑賞行為・実見によってはじめて「作品を判断する」環境が整い、選定が可能となるということを示しているのではないだろうか。では事前の荒選択の作業は無意味だったかといえそうでもない。3500点もの所蔵品を抱える当館の作品を片っ端から実見することは不可能であり、それゆえ何らかの形で事前に荒選定を行わねばならない。事前の荒選定の作業は、自分の求める作品の傾向を客観的に見、選定の照準を定める練習にもなったと思われる。

< 参考5：使用した調査票 >

決定した作品についての説明書を考えよう

作品名 (ふりがな)	作者名 (ふりがな)	
制作年	西暦 年 (年号 年)	
サイズ	支持体サイズ: h _____ cm × w _____ cm × d _____ cm	
	展示サイズ: h _____ cm × w _____ cm × d _____ cm	
	形状: 軸・屏風・額装 (面: 裸・ガラス・アクリル)・その他 ()	
材質	平面	支持体: 紙・布・板・その他 () 表現: 油彩・水彩・パステル・版画 ()・鉛筆・木炭・ その他 ()
	立体	材質: ブロンズ・木 ()・石膏・石 ()・ その他 () 台座: なし・あり ()
作品についてのメモ		
色		
形		
質感		
その他		
作品について最初の印象、実際見た感想、作品への思いを		

< 5月29日現在（収蔵庫内の見学後）の選定作品 >

※下線のついた作品は上記「実見可能作品」に含まれるもの

※網掛けの作品は最終的な展示作品

生徒A 「行く秋」 丸投三代吉 第二候補「甲地」藤原向意
生徒B 「ウサギ(4)」 野村正
生徒C 「淋しい水」 河野通紀
生徒D 「日本のかたち」上野長雄 第二候補「飾り窓」 上野長雄
生徒E 「あそび」 上野長雄
生徒F 「撮影開始」 川口雄男
(生徒G 「夢・家」 麻田浩) ※欠席のため実見せずに図版等で選定
生徒H 「ナルシスト」 松本宏
生徒I 「森の想」 高橋忠雄
生徒J 「少女」 白瀧幾之助
生徒K 「I'm HERE 6」 永井一正 第二候補「LIFE TO SHARE 4」
生徒L 「歩む道」 麻田浩

(5) 出張授業 4 6月16日

出張授業3で企画案について説明する中で、展覧会名を協議する上での注意点も述べた。その後の授業で展覧会名の協議が前野教諭主導で行われ、後日当時の候補タイトル（参考）についての報告を受けた。

それを受けての出張授業となった。

4回目の出張授業は、展覧会名に求められる明確性について話をすると同時に、高校生学芸員それぞれが執筆した解説原稿（5～600字程度）から展示用パネル原稿（250字程度）を作成する工程についての説明を行った。展覧会名については、展覧会のコンセプトが明確に表されるもの・具体的な展覧会像が把握できるものにするため、再考を依頼した。一方、展示用パネル用の解説文の作成は、自分以外のすべての高校生学芸員の解説文をそれぞれが読み、面白いと感じた部分に下線をひいてもらい、もっとも多くの下線が引かれた部分を残す形で文章量を減らすという方法を取ることにした。

後の授業を経て暫定的に決定したタイトルは「ぼくらの視点 あなたの出会い」。12名中10名が女子であるが「ぼくら」の方が未成年らしい、という意見で一致したとのこと。指導者側からは、「ぼくらの視点」と「あなたの出会い」という2つの言葉の関係性を強調するために間に「×」を入れることを提案。高校生学芸員一同の同意を得、タイトルは「ぼくらの視点×あなたの出会い」で決定した。

< 参考：候補タイトル >

- ①高校生（いはけなし視点）の可能性
- ②ガラスの破片にうつるもの
- ③多角形
- ④多感な空想と経験による事実
- ⑤私の目 あなたの目
- ⑥思い～本気の作品を本気で感じる～

※ 上記以外に生徒から出たタイトル案

あいまいみー ～根拠のない自信～／ 等身大の主張／ いはけなし視点から

ファーストインプレッション・ざ・市姫／ 個個個個個個個個／ モノクロ センス
 あいまいみー／ 僕たち LAB／ トーンダウン
 堂々巡り／ I caaaaan!～根拠のない自信～／ 160センチの世界 - 等身大の主張 -
 自分のカケラ探し展／『私たちの美術』

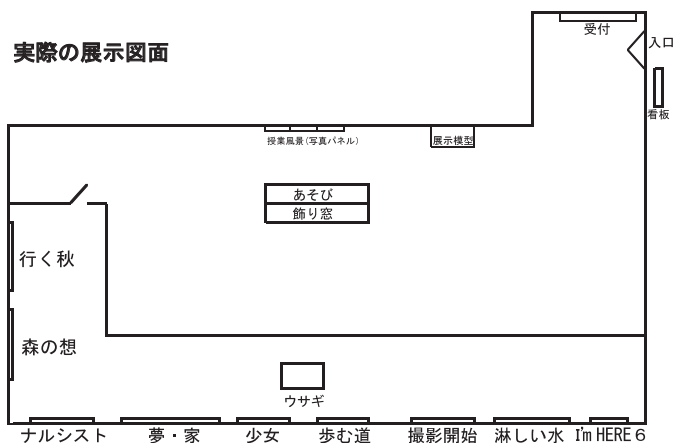
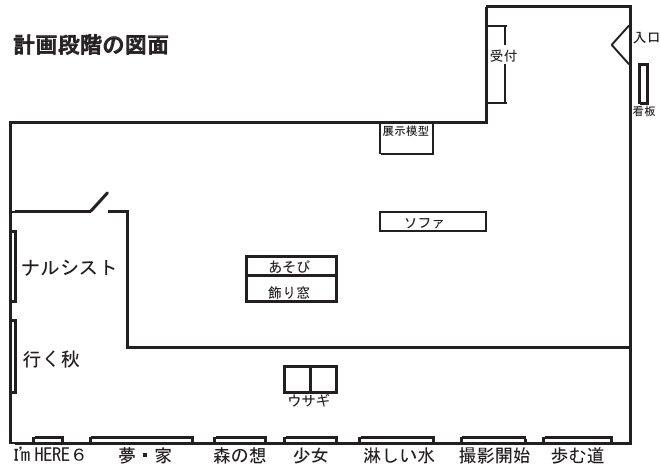
(6) 展覧会会場設営 10月13日

作品の取扱い作業にあたったのは日本通運の美術梱包スタッフである。高校生学芸員らも展示作業に加わり、美術梱包のスタッフの業務についての説明などを受けた後に作業を開始した。作品、キャプションや解説パネルの設置位置の検討(写真4)、写真パネルの設置などを高校生学芸員が行った。展示作業の全工程に高校生学芸員が立ち会うのが理想であったが、日程の都合でそれは叶わず、約2時間のみの立会いとなった。



写真4

作品の配置については、事前に高校生学芸員が作成した展示計画をもとに仮配置し、再検討した(下図)。



(7) 出張授業5 12月10日

展覧会終了後に総括のために同高校を訪れ意見を交わした。

4. 展示構成について

本章では、それぞれの展示物の状況を具体的に記録しておきたい。

(1) 展示物

作品、解説パネルの他、あいさつ看板、授業風景の写真、模型（写真5）を展示した。また、指導者側で作成した同展の記録集（A4 28ページ・全解説文掲載）を展示室内に配置し、自由に持ち帰ってもらった。

参考：あいさつ看板

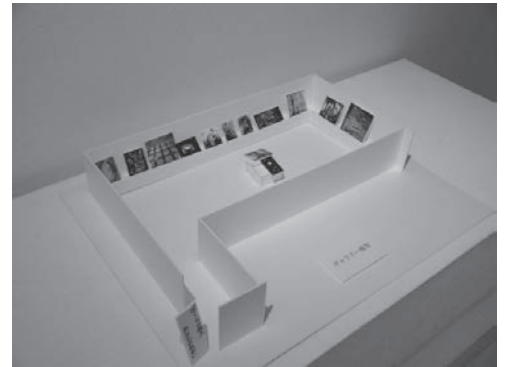
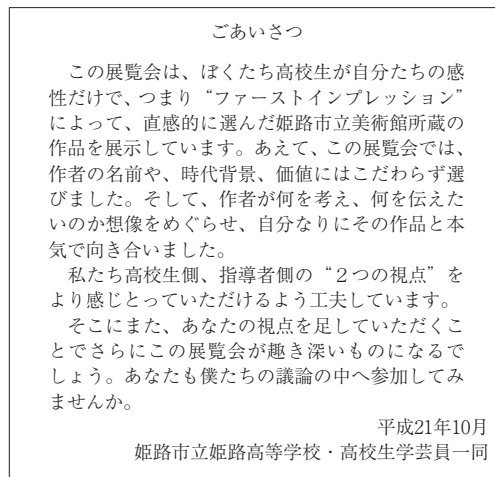


写真5



会場入口



会場風景



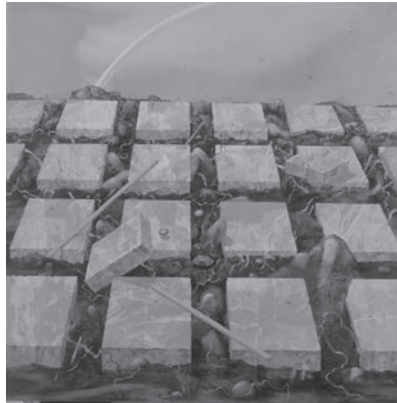
写真6

(2) 解説パネル

6月上旬には出品作品が確定し、作品の解説文作成が始まった。解説文の趣旨は、展覧会の企画書が決定した時点で共通認識を得るに至っており、比較的スムーズに執筆活動に移ることができたようだ。前野教諭による助言、校正を経て、7月中には解説パネル原稿が確定した。解説パネルは作品の手前に2種（生徒・学芸員）を並べて展示した（写真6）。

以下に作品図版と展示したパネル原稿を掲載する（作家名順）。なお、パネルの解説原稿は、高校生学芸員・当館学芸員が執筆した解説文の全文ではなく高校生学芸員それぞれが他生徒の文章の中から興味深く感じた部分を抽出したものとなっている。

1 麻田浩 歩む道 昭和49年 油彩・布



この絵は、人類が歩んできた歴史の裏の多くの犠牲者達の叫びが描かれているように思う。よく見れば地中には人の手や足、上半身までもが描きこまれていて、本当は気分が悪くなるくらい禍々しい絵だ。
 きれいな石畳と卵は、未来とその上を歩く新しい命や僕たちで、「今お前達が立っているその場所は祖先が引きつぎ、築き上げてきた文化の頂点だ。」とその下に眠る者たちは、傲慢に生きる我々人間の腕をその冷たい手でつかんでいるようにすら思える。それが恐ろしくも思えたが、同時に魅力でもあった。
 この絵は現代を風刺するとともに、今を生きる人たちに「任せたぞ」と言ってくれているのではないだろうか。
 (高校生学芸員氏名)

麻田浩は、同志社大学経済学部に進みましたが、在学中に気鋭作家・桑田道夫に師事し、昭和38年の初めての個展の開催を機に洋画家として生きることを決意しました。「歩む道」は、昭和46年からの長期滞欧期に描かれたものです。当時の麻田は、ヨーロッパの古典絵画から影響を受けつつも独自の表現を模索していました。空には虹が架かっていますが、キリスト教では、虹は完成をめざして奮闘する人を示すとされます。「歩む道」は麻田自身が画家として歩んだ道なのかもしれません。

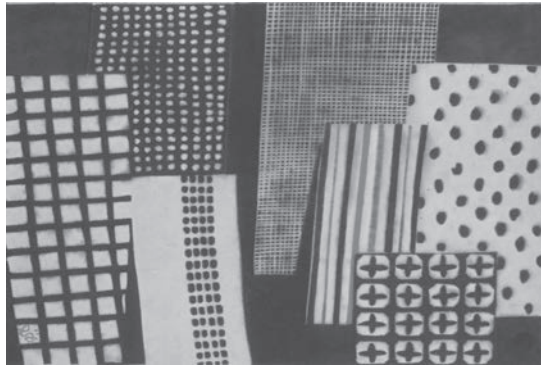
2 麻田浩 夢・家 平成6-7年 油彩・布



私は最初この絵を見たときに、本当に絵画なのか!? と思いました。黒い背景の中に白い建物がポーッと浮き上がっている感じであるにもかかわらず、建物の存在感はとても大きくて、且つ写実的であったからです。
 私なりの解釈ですが、麻田浩氏が「住みたい」とか「行きたい」と思っているのではなくて、「夢を見る家」という意味なのだと思います。昔は人が住んでいたのだろうと推測できます。この家は「また誰かと一緒に暮らしたい」と思っているのではないかと私は考えました。
 下界の事物をその存在感においてよりは光をあび空気で包まれた印象で表現しようとし、リアルの奥のリアルに感動しました。技法や思想その他もろもろ本当に芸術は奥深いなあと思いました。
 (高校生学芸員氏名)

麻田浩は幼い頃、板目に浮びあがる「シミ」などをじっと見つめて、自由にイメージを膨らませることに熱中したといえます。この作品に見られるフロタージュ的な表現や、違和感を持たせるモチーフの組み合わせは、シュルレアリスム(超現実主義)の影響を色濃く感じさせるものです。これらの表現方法は、前記の画家の幼年時代の体験に源泉を認めることができるでしょう。半開きの扉、誰も居ないように見える家の煙突から立ちのぼる煙、床に繋がっていない階段など、綿密に作品を観察すればするほど不可思議な点に気付かされます。

3 上野長雄 飾窓 昭和39年 木版・紙

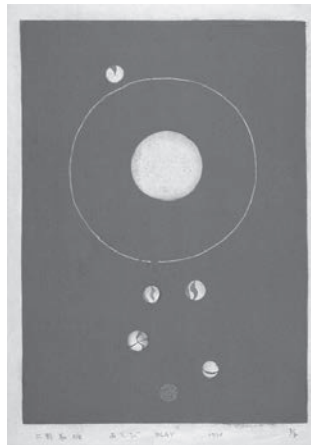


黒い画面に日本独特の様様がバランスよく配置されていて、かわいいと思わず声を上げてしまいました。この「飾窓」は、繊細な和を感じさせるデザインで、色に深みがあり、趣き深いのに、どこかモダンな印象を受けました。飾窓の後ろが黒だからこそ、奥深さが増えています。黒色のバックの中はどんな光景が広がっているのか、考えながら鑑賞するのも楽しいなと思います。また、青基調の飾窓の中に一本赤いラインが入ることによって、この作品がより印象的になっています。飾窓は、馴染のあるような柄が多く、見たことのない飾窓でも懐かしさを感じました。デザイン的な絵だからこそ、個人個人の想像する“窓”は様々だと思います。初めて見たときのイメージを大事にしながらも、じっくりいろいろな視点から見てほしいです。

(高校生学芸員氏名)

飾窓とは、いわゆるショーウィンドウのことです。意匠さまざまな縦長の長方形が配置されていますが、その緋（かすり）のような風合いや形状から、呉服店のショーウィンドウに陳列された反物が想起されます。この作品が摺られた頃の飾窓は、いま街中で見るような現代型のものとは異なるでしょうが、上野は何らかのショーウィンドウを眼にし、その粋な意匠に触発されて本作品を制作したのかも知れません。単純な模様と長方形という幾何学的な形状の組み合わせによる本作は、抽象作品として認識されがちですが、一歩ひいて、この画面自体が呉服店のショーウィンドウだと思って眺めてみると、リアルな具象画として鑑賞を楽しむこともできるでしょう。

4 上野長雄 あそび 昭和45年 木版・紙



ひかえめな無邪気さを感じました。この作品を風景で表すと女の子が毬つきをしているようなイメージです。背景の重ね摺りで出された紅色と朱色の中間のような赤色に濃いめの色なのに主張しすぎない、包み込むような温かさに引き込まれました。何となく周りにいる人の今まで気付かなかった良いところに気付いた感覚に似ています。鬼ごっこや隠れんぼの鬼と逃げる側を表しているように思いました。ビー玉のようなもようが夕暮れまで楽しそうに遊ぶ子どもたちが一人ひとり輝いている様子に思えます。

(高校生学芸員氏名)

1968年頃から、上野長雄は自身が「円の連作」と呼ぶシリーズを制作しています。それらの作品について、上野は「型が単純なものなので色彩・歪み等により自分の心象を表現して観念をよび醒して見た作品」と語りました。この作品は円の連作がちょうど終了した頃に制作されたものですが、ここに描かれた形も実に「円」ばかりです。画面上部の円については前述の「円の連作」の性格を引き継ぐもの、つまり抽象的な意味合いを持つものと解釈をすることもできるでしょう。例えば円陣やコミュニティのイメージなどの解釈も可能です。そしてビー玉たちは、その円に加わろうと寄って行く子どもたちの姿のイメージに重なるかもしれません。

5 川口雄男 撮影開始 (大船撮影所) 昭和17年 油彩・布



初めて見たときに、まるで写真のようで目の前で本当にドラマの撮影をしているかのような印象を受けました。今流行しているファッションにも似ているように感じ、おもしろいと思いました。川口雄男氏の他の作品は、日常の一瞬をとらえたものや、優しい瞳を持つ人々の姿があり、暖かい気持ちになるようなものばかり。特に女性の姿が柔らかい印象が持てました。この「撮影開始」でも台本を持つ女性や着物の女性の視線が下を向いていて、色っぽく、どこか優しい印象を持ちました。私たちが知らない、昭和を生きる女性のおしとやかさを感じる作品でした。

(高校生学芸員氏名)

川口雄男はこの作品を描いた前年に横浜の大船撮影所(松竹)取材した「朝風に立つ」という作品を制作しています。本作品は、その際に目にした光景を後にイメージし、自宅の庭で家族をモデルに構図をつくって描いたものです。具体的には、脚本を読む白いブラウスの女性は画家の姪で、手前の黄色い和服の女性と奥の日傘をさす女性は画家の夫人、さらにカメラを操作する男性は画家の弟ということです。「撮影開始」というタイトルからは、一瞬の動きやしぐさを表現しようという画家の意識が感じられます。実際にモデルを使って入念に構図を検討した成果が、独特の臨場感となって画面に現れています。

6 河野通紀 淋しい水 昭和52年 油彩・布



描写がリアルです。このリアルさにとてもひかれました。質感がまったく違います。バックを真っ黒にしてあるのは、木の台と鉄の器を強調するのが目的だと思います。明るいとところに目がいくので、誰もがまず水のところを見るでしょう。そして、この作品にはバックの一部分だけ、光沢のでる油絵の具が使われています。これにも何か理由があり、見た者に考えさせたいのだと思います。一つ一つが非常にリアルでありながらも、物にだけ光が当たっていてバックには光が当たっていないところがあったり、真っ黒なバックの中のうずらの卵だけが明るかったり、と少しおかしな、あり得ない状況でもありますがまたおもしろいところでもあります。リアルな描写に驚かされ、感心しながらも考えさせられるところに興味を持つ作品です。

(高校生学芸員氏名)

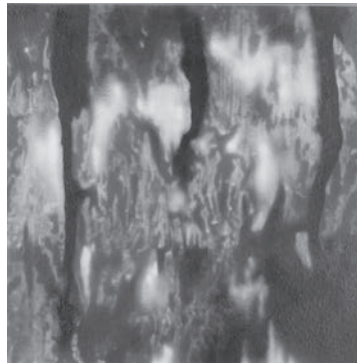
「私は独善的抽象化を好まない。リアリズムでもないが、現実の地表をふんで、リアリティのあるものを描きたいと思っている。」これは河野自身の言葉です。独善的・ひとりよがりではなく、誰もが共有できる姿に描こうという信念が、彼にスーパーリアリズム的な描き方へと導いたのでしょう。さらに、単なる写実の作業に終らない要素(非現実性)を取り入れることで、作家の個性が発揮され作品そのものに面白さが付加されています。現物と見まがうように描かれた「物」を、不自然に組み合わせるという手法は、描写がリアルであればあるほど非現実性・不思議さが際立ちます。このような彼の作品を、ある研究者は「マジック・リアリズム」と名付けました。

7 白瀧幾之助 少女 明治33年 油彩・布



<p>私はこの少女が何かに思い悩んでいる様子がなぜか似ている、と感じました。自分が「少女」の時空へ吸い込まれるかのような感覚がしました。何かを思いながら、考えながら、遠くを見るように。</p> <p>実際にこの作品を目の前にすると、思っていたよりもとても大人らしくて驚きました。作品名では「少女」となっていますが、本当にこの女の人は少女なのだろうか、と疑問を抱きました。影によって顔の表情をひきたたせていると思います。私はこの何かを考えているような少女のうつむいている表情に魅力を感じます。</p> <p>何時間でも向き合って、ずっと見ていたい作品です。</p> <p style="text-align: right;">(高校生学芸員氏名)</p>	<p>この作品が描かれた時代の洋画壇は、西洋のアカデミックな絵画の影響を受けた旧派(明治美術会)と、印象主義の影響を受けた新派(白馬会)が対立構造を見せていました。白瀧は新派(白馬会)の流れの中で、明治洋画壇の中核をなす一作家として活躍していきます。当時はこの「少女」は前衛的な作品であったと言えるでしょう。白馬会は、黒田清輝が率いるグループでした。この少女が描かれた3年前、第2回白馬会展で出品された作品に有名な同氏の「湖畔」がありますが、光の当たる角度や衣装(水色のストライプの和服に黒系の帯)などに類似点が多く認められます。同じく白馬会に出品していた白瀧が「湖畔」を間近に見たのは事実であり、その関係を伺わせる作品です。</p>
--	---

8 高橋忠雄 森の想 平成10年 アクリル・綿布



<p>何かひきつけられる。きっと高橋氏は、この絵を描いているとき、何かに苦しんでいたのだ、と思う。森の想いは、森の怒りであり、森林伐採の反対を訴えているとも思う。</p> <p>“想い”というものは、色々な色であらわすことができるけれど、白はどんな想にも染まり、無心で、黒はどんな想にも染められない強い想で、何か絶対的な感じがする。この正反対の二色を、混沌とした感じであらわしながらも交ざり合わせることはない。そこには緩やかな反発を感じる。木は自分の死すらも運命として受け入れる暖かい想いであるようだ。黒は木(自分)を殺す人間への怒りをあらわしている。</p> <p style="text-align: right;">(高校生学芸員氏名)</p>	<p>高橋忠雄は、もともとは彫刻家で前衛的な抽象作品を手がけていましたが、49歳の頃に倒れ、体への負担が軽い陶芸・絵画制作へと転向した作家です。ここに見るようなタイプの抽象・半具象的な大作から、地元加西の羅漢を描いたシリーズ作品、色彩の美しさを追求したミニ絵画など、その活動は多彩です。「森の想」は、黒や白、そして青の微妙な色彩を巧みに変化させることにより、空間の深みのみならず精神性さえも宿すことに成功しています。光沢感を排除したマチエールにも特色があります。絵の表面そのものの触感、物質感—マチエールへのこだわりは、皮膚感覚に鋭敏な彫刻家の視点の表れと言えるかもしれません。</p>
---	---

9 永井一正 I'm HERE 6 平成4年 シルクスクリーン・紙



<p>この一つつなぎの円のようにつながっているオオカミとヘビの体が地球の大地を表現しているように思いました。私たちは普段、主観でしか物事を見ていません。人間の被害のことが重大で、動物たちのことは二の次、三の次にしか考えられません。「I'm HERE 6」(私はここにいる)自分たちも地球上で同じように生きているのだと、動物たちが訴えているように思いました。私はこの二匹が弱肉強食の争いを止め、一つの緑をお互いに守っているように思いました。互いに手を取り協力して大切な資源を守っていかねばならないと、私たちに訴えているように思いました。独特の絵柄とパッと目をひく色づかい、動物たちの力強い瞳がそのことを強く訴えかけています。 (高校生学芸員氏名)</p>	<p>永井一正は、初期からおよそ35年間は企業のシンボルマークやポスターなどの抽象デザインを追及していましたが、のちに具象形へと転換しました。具象転換後に永井作品に登場したもので最も多いのは動物です。自身が描く動物について、作家は以下のように語っています(一部要約)。「これまでの人間中心の世界には見えてこなかったもの、我々が共有すべき相手としての生命というものを、彼等にかわって表現していかなくては本当の意味での生命に対する畏敬の念は象徴されない。だから単にリアルに描いてもだめで、象徴化が必要になる。僕が描くほとんどの動物が人間みたいな目をしているのは、彼等が人間から見た愛玩用の動物ではなくて、人間と対等なものとして存在するということ。」</p>
--	--

10 野村正 ウサギ(4) 不詳 木彫



<p>何度もこの作品を見直していくうちに、色々なことを考えるようになりました。小さくて狭いウサギ小屋の中にいるような飼うウサギの姿ではない、しなやかで伸び切った身体、遠くを見すえる瞳、ピンと立った耳、太くて短く、どっしりとした足。野生のウサギのように、美しく堂々としているウサギだな、と思い直しました。二匹で一組のこのウサギ達のタイトルは、何の変哲もない「ウサギ」。いったいこの二匹は何をしているのでしょうか。私は夫婦のウサギが子供を護る為に空からの敵に対峙している様に見えました。 どんな作品もじっくり見ることで、自分の中で色々な世界が広がります。この作品を見ている貴方の中にはどんな世界が広がりましたか？ (高校生学芸員氏名)</p>	<p>野村正は、社寺彫刻師の内弟子として職人的技能を身につけた作家です。師の没後はその技を継いで社寺彫刻師として活動しています。昭和6年には上京し、日本美術院同人の彫刻家・佐藤朝山の阿吽洞学童に入門、院展などに出品しながら佐藤朝山の助手として社寺彫刻等の制作に従事しています。野村正の作品は動物を題材としたものが非常に多くなっています。戦前の展覧会出品作のほとんどが馬か犬で、そのほかにも鳩、鷹、牛、蛙、ネズミ、小鳥など多彩です。今回の出品作品のウサギは、やや荒削りな仕上がりで量感を強調したものになっています。ソフトな彩色を施すことにより、ウサギそのものの愛らしさを示すと同時に、どっしりとした量感によりモニュメンタルな雰囲気も感じさせます。</p>
---	--

11 松本宏 ナルシスト 昭和39年 油彩、砂・布



直感的に自分の大好きな作品だと感じました。色合いも暗くて頹廢的で、ブラックな雰囲気も素敵だと思います。明るい色、ぱっとした色が使われているわけでもないのに、実物を見ると凄くインパクトを受けます。油絵ですが砂も使われていて、ざらざらとした虚ろな雰囲気がかもし出されています。60年代のロックが思い出されました。背景の汚れのような、ヒビのような描き方も綺麗だと思います。

(高校生学芸員氏名)

ここに見る「ナルシスト」は、この時代の松本作品の傾向を顕著に示すものです。極度にデフォルメされた、鳥とも蛙とも見まがうような人間がこちらを向いて並んでいます。大きな口で何かを叫んでいる人、目を閉じて佇んでいる人、手を振り上げている人、そしてごつごつしたマチエールと色彩…何やら不穏な雰囲気が画面を覆っています。ナルシストというタイトルは、一般的に「うぬぼれた人」「自己愛者」といった解釈をすべきか判断が難しいところです。松本は昭和57年にはナルシス（自分の美しさにこがれ死にした青年）を直接的に表現した作品「ナルシス」や「レダ」も手がけており、ギリシャ神話への関心を示しています。

12 丸投三代吉 行く秋 昭和33年 紙本着色



今にも人々の話し声や、「おーい」と人を呼ぶような声が聞こえてきそうな気がします。「お父さん帰ろうよ」「もうちょっと待ってな」といった会話が聞こえてきます。時間的にもおながすいて早く帰りたいと思っているのであろう子どもの様子が伺えます。夕日は描かれていませんが、木や人の影からこちら側に夕日が沈んでいく美しい光景があるのだろうと想像させられます。この作品の中の人々は毎日忙しく農作業をしながら、充実した日々を楽しく送っているのだろうと思うくらい、生き生きと描かれていてとても楽しい気持ちになります。児童絵画のように健康的で、色使いもあたたかく優しさが溢れていると思いました。見ていて飽きない作品です。

(高校生学芸員氏名)

丸投三代吉は徴兵によってシベリア抑留生活を体験し、氷点下50度下での過酷な毎日を経験した画家です。無事に帰国を果たした時、「生きていることへの感謝・喜び」を実感し、それを画に向けるようになりました。「この世に生きているものは、人であれ、小動物であれ、昆虫であれ、魚であれ、すべて友達なのです。」とよく語っていたそうです。

秋の農作業の一コマを描いた本作品は、画家にとっての出世作です。昭和33年、姫路市展で市長賞を受賞、続いて再興院展で初入選となりました。遠景でやや見下ろす構図で描かれた人々の営みの情景は、私たちが日頃忘れがちな精神的な豊かさの価値そのものを提示してくれているようです。

5. 高校生学芸員の感想より

授業の中で、高校生学芸員の意見を複数回にわたって綴ってもらった。それを以下に記録しておきたい。彼女らの感想は、今回の共同展開催の教育的な意義を示しているものと思われる。

(1) 一学期終了時の感想より

- ・学芸員になるという貴重な体験をさせていただけるということで、大変嬉しく思っています。最初は内容があまり分からなくて微妙でしたが、自分で絵を選んだり模型を作ったりし始めると、だんだん楽しくなってきました。ただ、その反面、テーマを決めたり、自分の絵に対する考えを書いたり等、楽しいけれどとても大変でした。大体できあがってきたので、展覧会当日がどうなるか楽しみです。一学期はこの内容だけで終わってしまったけれど、実技では学べない体験ができたので本当に良かったと思っています。テーマやタイトルを決める時、みんながそれぞれ個性が強くてまとめるのが大変だったけど、最終的にまとまったので、チームワークの大切さを学びました。
- ・美術館の保存している絵を見ることができたり、皆と意見交換したりと貴重な体験をたくさんすることができました。この展覧会を頑張って成功させたいです。
- ・他人の意見を否定することなく、一つの見方として捉えること、また作品を見ることによって自分なりの解釈をし、それを人に伝えて更に考察することを学びました。
- ・たくさんの作品を実際に見ることができてよかったです。
- ・もっと絵を描きたかったです。
- ・展覧会を作っていく過程で、今までと違って美術というものをじっくり見られて楽しかったです。感じることを文にして人に伝えるのは本当に難しいことだと改めて思いました。それと自分の表現力の無さが悲しかったです。作品と向き合うときは、自分の感想でなく、作者の思いを大事にして見ることを学びました。それと作品を扱う上で気を配ることが多いことも学びました。
- ・まず今までを通して思うことは、裏方で球技大会や姫高祭を目指して準備、運営を行う生徒会の仕事と似ているなあと思いました。今年の美術の授業では、自分が作品を作るという視線ではなく、既に作られた作品と向き合う、それも自分の考えを主張する。作品への思いを文章にするのは難しかった。美術館の収蔵庫の中へ行ったり、1つ1つを決めるためにみんなで会議したり、模型作ったり、ちらし作ったり、どんどん新しいことと出会ってとっても充実していました。1つのことをするとき、みんなで1つ1つ丹念に、気持ち込めてやっていく。みんなまで1つの空間をつくる。すばらしい経験をしていてとっても楽しく、自分の表現力のなさにショックしつつ、学芸員ってカッコいいなあと思いました。この学年で本当によかった。
- ・美術、芸術というのは奥深いことを改めてより一層ふかく感じました。また、美術・芸術というのは作品・作者だけではないということも知りました。今までの作品の見方や作品への思いの込めようが変わりました。
- ・今までに経験のないことばかりで、一時間、一時間学ぶことが多かった。はじめの頃はまったく形の見えなかった展覧会企画が、みんなでどんな展覧会にするか決めたり、気に入った絵を選んだり、その絵について考えてみて文章化したりする過程で、少しずつ形が見えてきて楽しくなった。絵について文章を書くのはとても難しく、思うようにいかなかったけれど、文章にしようと言葉を考えることで作品に対する気持ちに新しく気づくことも多かったと思う。企画の中で一番楽しかったのは展覧会のタイトルを決めることだった。みんなのこの展覧会に対する気持ちがよく表われていておもしろかった。「あいまいみー」がぼつになったときは悲しかったけど、最終的なタイトルは全員一致で決まったのでうれしいし愛着がわいた。

- ・芸術に深く関わっている人の芸術に対する誠実さを学べたと思う。また、作品をあつかうことがどれだけ大変なことなのか、今まで知らなかったことを実際に見ることで具体的に学べた。
- ・「自分達で展覧会を作る」という高校生にはなかなか出来ない貴重な体験をさせて頂くことになり、初めはすごく楽しみな反面、本当に出来るのか全く自分で完成のイメージが持てず、不安でもありました。けれど、自分で作品を選び、実際に美術館の収蔵庫の中に入り実物を見ての新たな発見や考える事が多く、すごく新鮮でした。そして、一つの作品を向き合うことで、自分なりの解釈ではあるけれど、自分の感じた事を他の人に見てもらうことで個性や新しい何かをあたえることが出来る！これも「美術」であり、普段は作品を作るばかりだけれど、展覧会制作によって私の「美術」に対する考えの幅が広がったと思います。
- ・画家の人たちは、作品の中に様々なメッセージや主張をめぐらせている。そして、その作品を違う視点から見ること、新たな解釈や発見をしたり、色々なことを考えさせられることを学びました。
- ・今までにやったことのない初体験のものばかりで、次に何をやるかが毎回毎回楽しみでした。初めて作品が収蔵されているところに行って、本物の作品をたくさん見れて、良い経験になりました。自分で選んだ作品も間近に見れて感動しました。それをふまえた上での、展覧会の企画は、題を決めるだけでも一苦勞で、大変でした。実際の展示はまだだけれど、もうだいぶ迫ってきているので、良い展覧会にできるよう、頑張りたいです。
- ・一つの展覧会を開く大変さと、隠された努力が分かりました。こんなに人数がいても上手にいかないものだと、あらためてこの仕事の凄さを実感しました。
- ・美術館の倉庫に入れるなんて思わなくて、貴重な経験でした。でも色々作ったりもしたかった。学芸員さんがいらして僕らが音楽を語るように美術の世界を語り合えたのは、かなり絵の見方が変わる一件でした。アートは深い。題名ひとつ考えるのにもユニークじゃなくてシンプルで分かりやすいものがよかったりと自己満足の芸術でもだめなんだなと思いました。絵の感想は本当に苦勞しました。
- ・絵の裏の多くの思いに気づくことができたり、感じとろうとすることで無限大に楽しめるんだとわかった。
- ・普通に授業をやってきたけれど、よく考えるとすごいことをさせてもらってるなと思います…。一番感動したことは、やっぱり収蔵庫の見学です。自分が見たいと思った作品をどんどん見せていただいて、たくさんの美術作品をかなりの近距離で、生で見れてかなり楽しかったです！大きい絵とか迫力がかなりやばかったです。長時間だったのも見てるときは気にならなかったです。この経験は一生忘れないです。みんなで展覧会のために協力し合って作業するのはとても楽しいです。今までなかった特別な企画ができて嬉しいです。今後もし出来るなら後輩たちにもやってもらいたいです。
- ・美術館の仕事に直接ふれてみたことで、ひとつの展覧会を開くことの大変さを学びました。構想を練って、展覧会名を考えるのにも何回も話し合っ、他者に伝えることの難しさも分かりました。
- ・最初に展覧会を自分たちでプロデュースするという話を聞いたときは、全く意味が分からなく、無理無理と思っていましたが、学芸員さんの話を聞いたり、実際に絵を見に行ったりして気持ちが変わってきていい展覧会を作りたいと思っています。めったにできない貴重な体験なので、頑張っって自分で納得してみなさんにも喜んでもらえるようなものにしたいです。
- ・みんなで協力して一つのことを決めたり作ったりするのは難しいけど楽しいことでもあると思いました。

(2) 完成された展覧会場、展覧会を見た感想より

- ・準備をしていたときと違って、会場に緊張感があって、作品一つ一つの存在感が際立っていました。照明の当たり方で、作品がこんなに違って見えることに感心しました。写真や模型も、会場をつくっていることに初めて気がつきました。
- ・自分の書いた文が、プロの画家さんの絵の横に置かれていることに、緊張しました。客観的に見てみると今回の企画に参加できたことが幸運だと思いました。
- ・あきらかに、自分の選んだ作品は場違いな気がしました。でも、個人的に好きな作品なので満足しています。
- ・照明がついているだけで、展覧会の雰囲気が変わるなあと思いました。思っていたよりも“ファーストインプレッション”や“視点の対比”が感じられなくて、ただ絵を見ているおばあさんとかいたのでちょっと残念でした。完成された展覧会を見て、改めて学芸員の方々や先生や運搬にたずさわってくださった方々のおかげでこうしてみんなの選んだ絵が見てもらえるんだと思いました。
- ・実際に設置された様子を見て、自分が選んだ作品が飾られているのが何だか不思議な感じがしました。自分で描いたものではないけれど、企画してきてすごく思い入れがあったので見た瞬間「あ〜」って思いました。みんながそれぞれ選んだ作品が、校内ではなく公の場に展示されるという機会なんてもう無いと思います。本当に良い経験になりました。
- ・ライトの感じがすごく良かった。展示作業の時とは違う、展覧会独特のオーラがでていました。1点1点が本当に個性的でした。全部の作品を見た後、なぜかホッとしたような、おだやかな気持ちになりました。あつかったです。こんな貴重な体験をさせていただいて本当にありがとうございました。
- ・授業でパソコンにデータを打ち込んだり、発泡スチロールを切ったりしている時にはあまり実感がわかなかった展覧会づくりも、実際に会場に行ってみて、展示したことによって、自分たちがこの一つの展覧会をつくり上げたんだな、と誇らしい気持ちになりました。
- ・まず、一番思ったことは、照明によって絵の雰囲気がすごく良くなったなあということです。倉庫で見た時より、10倍も20倍もキレイに見えました。あと、作品の並べ方もじっくりきていて良かったです。展覧会にすることで、自分達のことを他の人に発表する機会はなかなかないことなので、あらためて展覧会を見に行ってみて、して良かったと思いました。携わっていただいた人々に感謝しています。
- ・準備していたときと全然様子が違ってドキドキしました。空調機の音が聞こえるくらいに静かで、神聖な場所のように空気が張りつめていたので緊張してしまいました。私が見ている間に10人くらいの人が入り出ていましたが、私たちの解説を読んでいる人があまりいなかったのが残念でした。
- ・土曜日に1人で展覧会場に入ると、何か張りつめている空気があり、これぞ展覧会の雰囲気なのか、と初め感じたものがあり、とても充実した時間を過ごせた。私はいろんな展覧会に行ったわけではないけれど、何かやはり、まだまだ高校生だなと思った。でも、展覧会に来られたお客さんがみんなの絵を見ているのを見て、この人は何を考えているのかなあなど、考えると楽しかった。
- ・迫力があってちょっと感動した。お客さんは自分だけでしたが、たくさん来てくれたみたいで嬉しかったです。先生のコメントかっちょよすぎて恥ずかしくなる自分。
- ・自分たちで考えてきたものがすごく立派な展覧会として完成されていてとても嬉しい気持ちになりました。配置もばっちりだったと思います。自分達の感想と、作品解説が横に並べられてあることと、壁に貼らずに下に置いたことが良かったと思いました。ぱっと作品だけを見渡せるし、集中して見るができると思いました。

- ・ライトアップされてきれいに並んでいる様子を見てみると、今まで感じていた作品のイメージをはまた違った印象を受けました。特に「行く秋」の赤い色がとても目立っていて、その隣の「森の想」は対比されるように静かに目に映り、その隣の「ナルシスト」でまた強いインパクトを受けました。あの三作品は、この展覧会場の中で特に目を引く所だと思いました。こうやって貴重な体験ができて、本当によかったです。

(3) その他、終了後の感想より

- ・収蔵庫に入れてもらったことが、今でも強く心に残っています。本当に“生”のままの作品に間近で触れることができるとても良かったです。
- ・ひとつの展覧会を作ろうとすると、ほんとにたくさんのことを計算しないといけないということを経験しました。「美術」に関わる大人たちの存在が嬉しいと感じました。
- ・一番は倉庫に入れて、プロの仕事を少しでも経験できたのが新鮮でした。
- ・チラシの文字や配置で「展覧会」を表すのは、とても難しいなあと思った。言葉遣いについても難しく学ぶところがたくさんあった。1つの絵と向き合い、また、新たな自分を発見！みんなの価値感（観）にもふれられて良かったなと思った。
- ・インパクトがありつつも見やすく、相手に情報が正確に伝わるように（チラシを）デザインするのってすごく難しいことだなと思って、デザインにも興味がわきました。展覧会の文章考えているときも、人に言葉を伝えるのって難しいなって思いました。
- ・（作品を扱う輸送業者の美術スタッフが）思っていたより簡単に作品を扱っていて驚きました。
- ・説明文や写真の位置を決めるのをしたけれど、見る人が一番見やすい位置、間隔を決めるのは思ったより難しかったです。
- ・作品の配置について、最後までもつれたけれど、展覧会に行ったとき、一番じっくりきました。みんな決めた展覧会、やっぱりいいですね。
- ・パネルを作る作業をしましたが、このような裏方の仕事がないと展覧会ではできなかったと思うので、そういう点ではやりがいのあり仕事できて満足です。
- ・模型づくりを改めて反省しました。完成品をいまいち想像できなくて失敗の連続で、展示されている模型を見て、細かいところにもっと気を配るべきだったと思いました。作品をガラスケースに入れる様子は初めて見て、思っていたよりケースの中が移動しやすそうで驚きました。

6. アンケート集計結果

会期中、展覧会場内にアンケート用紙を設置した。寄せられたアンケートは58枚であった（資料4：集計結果）。自由表記の欄に多くのご意見が寄せられたので、以下に転載しておきたい。

- ・違った視点からの解説はとても作品を味わう上でわかりやすく、又、素直な高校生の解説は感動的でした。（44歳女性）
- ・高校生の方の解説が良かった。珍しい企画なので今後も続けてほしい（18歳女性）
- ・高校生の文章はどちらかといえば主観の強い“感想”の意味合いが強く、学芸員の文章は少々“知識”的側面が強く感じられた。少々かみ合っていない印象を受けました。（40歳男性）
- ・とにかくみなさんが（考える）ことについて考えられているのが、とても気持ち良かったです。がんばってください。（38歳男性）
- ・高校生の感性はみずみずしくて素晴らしいですね。作品解説の表現がどれも素晴らしかった。（28歳女性）
- ・一般の方々、又若者達子供達ももっと美術に関心を持ってほしい。（69歳女性）

- ・高校生が作品と無理やり向き合い、そこでこれ迄に感じなかったことが感じられるようになる様が、面白い。(68歳男性)
- ・チラシを見て、面白い企画内容だなと思って見に来ました。もっと大規模で、またこのような企画があれば来たいです。自分の高校時代にも、このような体験の機会があればなあと感じました。(25歳女性)
- ・準備から展示までご苦労様でした。作品解説の比較、G o o d。(58歳男性)
- ・男子生徒は2人？(62歳男性)
- ・高校生は感性が豊かで画の鑑賞にもしばしば感じられる言葉で語られていて感心しました。若い気持を私も持ちたく思いました。(77歳女性)
- ・このような企画展を見たのは初めてだったので、とても興味深かったです。企画展という授業を通して、鑑賞の力だけでなく、作り出すことの喜びと苦労を感じているんだなと思いました。(21歳女性)
- ・2つの作品解説が、見る人によっていろんな考え方があるということを手前に表せていると思いました。(16歳女性)
- ・高校生の感じたことを読んでみると、美術への関心の高さが伝わってきます。解説があるとなるほどと思いますが、見ている私の見方がいけないかなと思ってしまいました。(56歳女性)
- ・今後の鑑賞の参考になりました。(62歳女性)
- ・姫路の美術館の企画展示には時々行くので、興味があったので見学させていただきました。解説があったので分かりやすかったです。(44歳男性)
- ・とてもよく考えて、選んでくれたと思います。あなた方の視点、とてもよかったです。これからもその感性大切に！！(52歳男性)
- ・今回の展覧会の主旨が聞いてよかったです。高校生の感性のようなものにふれることができたと思います。(20歳女性)
- ・非常に面白い企画であった。今後も是非つづけてほしい。自分の学生時代の先生の若い時の作品に出会えて感動しました。(46歳男性)
- ・高校生が学芸員さんと、ほぼ同じ仕事ができ、自分のコメントが会場で見てもらえる素晴らしい企画です。(46歳男性)。
- ・このような展覧会は、はじめてで、すごく心に残るものばかりでした。私とあまりとしもかわらない人が、こんな視点で見ているんだとすごく感動し、面白かったです。(16歳女性)
- ・自分たちで作品を選んで、解説を作って展覧会を開くのは、すごい楽しそうだなと思いました。貴重な体験ができたみたいで、うらやましいです。(16歳女性)
- ・私の好みのシュール的、抽象的な絵があった。麻田浩の2作、河野通紀、松本宏等は、大学時代から描いては失敗している、あこがれの絵だ。今度ぜひ、またチャレンジしたい。(52歳男性)
- ・高校生と学芸員との作品解説をくらべながら見ることで、作品から伝わる内容、着眼点の違いを見ることが出来てとても良かったと思います。(26歳男性)
- ・もう少し作品があればいいことありません。(44歳女性)
- ・高校生による解説が思ったよりもきちんと書けていて、たいへんわかりやすかった(19歳女性)
- ・油彩はすごく本物みたいで素晴らしかった。昔の絵でも今も変わらずその時の思いが伝わってくるようだった。(34歳女性)
- ・学校現場と美術館が、生徒のために連携してできた素晴らしい実践だと思います。(53歳男性)
- ・多くの館藏品の中から何を選ぶかから決めていったのは、より作品を見る目がシビアになり、真剣さが伝わってきます。最初の感動を大切にしている、こちらも新しく感じさせられました。(57歳女性)
- ・直接、じかで絵を見るのと、鏡一枚を通してみるのでは、また印象がちがうなあと思いました。

(17歳女性)

・様々な絵が展示してあり、おもしろかった。自分と同じ高校生がどういう視点でこの絵を見ているのかわかり、おもしろかったです。自分と同じような考えがあったり、こういう点のところが気になるのに、といたことが多く参考になりました。(15歳男性)

・もうすこし、自分達を前面に出し、何が言いたいのかハッキリさせる事が欲しい。(60歳男性)

・私たちと同じ年代でここまでかけるなんてすごいと思った。私も美術部なのでがんばりたい。

(16歳女性)

・もっと大きくやった方がよい。(42歳男性)

・学芸員の方の話がとても興味深かったです。これからの勉学等、活かしていけたらと思います。

(18歳女性)

・高校生から見た作品の感想は参考になりました。(66歳男性)

・先生の視点、学生の視点の違い、若々しい感性、するどい見方、興味をひくガイドでした。(56歳女性)

・展示物は少なかったけど、見ごたえがありました。(39歳女性)

・企画としておもしろい。(65歳男性)

むすび

本展のコンセプトは、「高校生だからこそ可能な展覧会」であり、作品を介した思考を表現する展覧会であった。さらにそれが高校生でなければできない展覧会であればあるほど、展覧会そのものの存在意義が向上すると考えていた。“高校生それぞれが作品にコミットし自分なりの解釈を行い、それを展覧会場で提示する。来場者は作品とその解釈(解説文)に会場で出会い、自己を関連付けながら有機的に鑑賞して欲しい。”という思いがあった。そのため、展覧会に出品する作品は、「私の大切な一点」である必要があった。

実際展覧会を鑑賞した方々からは、高校生12名それぞれが、「私の一点」に本気で向き合っつむぎだした言葉(解説文)が心の琴線に触れた、といった内容の感想も寄せられたのは光栄であった。その他にも多数の好意的な意見をいただいたことを思うと展覧会そのもの、つまり連携事業の成果物の評価は一定のレベルに達することができたと考えている。参加した高校生学芸員にとっては寝耳に水のスタートであったが、授業を展開していく過程で自分が実際に展覧会創りに参加しているというリアリティを獲得していった様子がアンケートからうかがえる。展覧会の成功は、高校生学芸員の瑞々しい感性と創造意欲の賜物であったと思う。

本展の最大の特徴であった2つの視点(高校生学芸員と指導者)の提示については、多くの意見が寄せられた。あいさつ文やチラシで趣旨を強調したことが功を奏し、解説パネルが2点ずつ設置されていることに対しては理解不足から生ずる意見は殆どなかった。むしろそれぞれの着眼点の違いを読みとけながら鑑賞し、それぞれに思いを馳せた来館者が多かったようだ。美術展としては稀有なスタイルであったが、一定の理解を得られたと考えてよいと思われる。

高校生学芸員による展覧会実施事業は、美術館と高等学校という異なる2者の連携によって行われたものだが、その2者間に様々な相違点があったからこそ複合的な教育が可能となった。例えば、学びのスタイルの相違点もその一つである。美術をめぐる学びには大きく2つの性質がある。美術を知る学びと、美術を通した学びである。前者は、美術作品に描かれた歴史的背景を知るなどの知識蓄積を目的とするもので、後者は、美術作品の制作や鑑賞を通して生じる心の動きに主眼を置き、知識を伸ばすことを主たる目的としないものである。美術館の普及活動の多くは前者に重きをかけており、学校教育における美術・図工教育は後者に重きをかけている、という解釈が一般的である。このように異なる二者が出会い、それぞれのスタンスで関わりあって作られた展覧会は、新し

い学社共同学習のスタイルを提示できたのではないかと考える。

今回のような試みは、全国高等学校美術、工芸教育研究大会の開催がなければ叶わなかっただろう。美術館学芸員として高校の教育現場に参入させていただいた経験は、貴重で学び深かった。その上、熱意ある高校教師や高校生の学びの姿から手ごたえを得ることもできた。高校生学芸員をはじめ全国高等学校美術、工芸教育研究大会の関係者の方々に感謝の意を示し、本稿をとじたい。

※本展の企画に参加した高校生学芸員は以下の12名（50音順・敬称略）。

井口美彩貴、内野侑香、古林由衣、坂田千紗、清水美里、世古宗司、濱田綾斗、濱田芳美、古隅香名、松浦楓、満山沙葵、山岡利名

第46回全国高等学校美術・工芸研究大会<2009兵庫大会>における

高校生学芸員による企画展覧会の実施に関する覚書

姫路市立美術館（以下「甲」という。）と兵庫県高等学校教育研究会美術・工芸部会（以下「乙」という。）は、第46回全国高等学校美術・工芸教育研究大会（2009兵庫大会）において開催される高校生学芸員による企画展覧会（以下「展覧会」という。）の実施に関し、別紙のとおり覚書を締結する。

なお、本覚書の成立を証するため本書2通を作成し、甲及び乙が各1通を所持する。

平成21年 月 日

甲

住 所 姫路市本町68番地2-5
団体名 姫路市立美術館
代表者名 館長 山脇 佐江子

乙

住 所 兵庫県高等学校教育研究会美術・工芸部会
団体名 会長 藤井 淳一
代表者名 (兵庫県立東はりま特別支援学校校長)

1 展覧会の実施要領

- (1) 名 称 高校生学芸員による企画展覧会
- (2) 主催者 全国高等学校美術・工芸教育研究会、兵庫県高等学校教育研究会美術・工芸部会
- (3) 会 期 平成21年10月14日～10月17日
- (4) 会 場 市民ギャラリー特別展示室（イーグレひめじ地下2階）
- (5) 観覧料 無料

2 展覧会の開催に関する甲の協力

- 甲は、展覧会の開催に関して次のとおり協力するものとする。
- (1) 展覧会の計画段階における情報提供や生徒への指導を行うこと。
- (2) 展覧会の企画を行う授業へ学芸員を講師として派遣すること。
- (3) 展覧会で展示する作品を貸出すること。
- (4) (3)の作品の集荷、移動、陳列、撤去、返却に際して立会いすること。
- (5) 広報等のために必要となる作品のポジ等を提供すること。
- (6) (4)の業務を委託するに際して必要な業者等の情報及び業務に伴う保険加入に関する情報の提供と手続きの補助を行うこと。
- (7) その他必要な業務

3 乙が行う業務

- 展覧会の開催に関し、乙は次の業務を行う。
- (1) 展覧会を企画すること。
- (2) 展覧会の企画を行う授業へ学芸員を講師として派遣するよう甲に依頼すること。
- (3) 展覧会の展示作品について甲に借用依頼を行うこと。
- (4) (3)の作品の集荷、移動、陳列、撤去、返却を専門業者に委託し実施すること。
- (5) (4)の業務委託と併せて必要な保険に必ず加入すること。
- (6) 展覧会の会場の施工、ディスプレイの制作を行うこと。
- (7) 展覧会の広報物を作成し、配布すること。
- (8) 展覧会の会期中、会場の警備及び作品の監視業務を行うこと。
- (9) その他必要な業務

4 展覧会の開催に関する責任

- (1) 展覧会の開催に関する上記3の業務については、乙が責任を負う。
- (2) 展覧会の運営上の事故については、すべて乙の責任において処理する。

5 費用負担

- (1) 展覧会の開催に要する一切の経費は乙が負担する。
- (2) 甲は、上記2の業務に要する経費のみを負担する。
- (3) 甲は、乙に貸し出す作品について、乙から借入料を徴収しない。

資料 2

学習指導案 **展覧会をひらく**

1. 題材名「展覧会をひらく」
2. 題材設定の理由
 - (1) 題材について
展覧会をひらくことにより、学芸員の仕事などを知り、作品鑑賞に興味を抱かせる。
 - (2) 生徒の姿態について
3年生文系の中で、自由選択によって履修している。1年生次より、作品についての文章や自分の作品についてのアピール文章などを書いたり、普段から何かにつけ感想やレポートなどを書かせたりして、文章を書くことには慣れている。
 - (3) 指導について
展覧会企画から作品選定にいたるまで、個人的な思いだけでなく、指導者側やそれぞれのチームワークと話し合いによって、作業を進めていくようにする。週に二時間(45分)という短い時間の中で、手際よく作業が進むようにさせる。
3. 目標
 - ・ さまざまな作品に実際に触れることで作品鑑賞の力を身につけることができる。
 - ・ 展覧会を企画することで、客観的な視野や考えを持つことを学ぶことができる。

4. 指導計画

学 習 活 動	時 間	指 導 上 の 留 意 点
1. 導入 展覧会を知る・作家の作品を観る ・資料を観る	4月 1	・プロの作品を観る。 ・さまざま作品のちらしや図録を見て、どのような展覧会があるのかを知る。 ・学芸員の仕事について直接聞く。
2. 展開 講師講演「学芸員の仕事について」 講演「展覧会のつくりかた」 ・企画書の作成 作品選定、取蔵庫見学(校外) 作品についてのコメント原稿作り 展覧会名を決める ・チラシ案内用の捺捺文の作成 作業 ・展示図作成 ・会場模型等作製 ・チラシの作製 ・キャプションの作成 ・作品についてのコメント校正	5月 1 6月 2 2 6	・展覧会の作る手順について学ばせ、自分だけの企画書を作成させる。 ・解散ではなく、できるだけ自分の感性で選ばせる。 ・選んだ作品について、調べたことではない自分なりの解釈をさせる。 ・指導者側と生徒の思いを展覧会名に込められることを学ばせる。 ・展覧会名を決めるにあたって、展覧会のあいさつ文を全員に書かせる。 ・分担して、作業をすすめていく。 ・コメント作成には、何度も校正を入れていく。
3. まとめ 作品展示に立ち会う 感想、鑑賞会	10月 2	・展示作業を見学する。 ・感想などを述べあう。

- 6 乙の費用負担の根拠確認
 - (1) 乙は、この覚書の締結と同時に、上記5において負担する経費の予算措置をしていることが明記されている文書を甲に提出しなければならぬ。その文書は、第46回全国高等学校美術・工芸研究大会(2009兵庫大会)又は兵庫県高等学校教育研究会美術・工芸部会の事業計画書・予算書、又はそれに準じるものとする。
 - (2) 甲は、(1)の文書により、乙が上記5において負担する経費の予算措置をしているか否かを確認する。
 - (3) (2)において、甲が予算措置を確認することができない場合は、当該確認がとれるまでは乙に対する作品の貸出しを行わない。
- 7 作品の取扱に係る確認事項
 - (1) 集荷・返却時の出品作品のコンディションチェックについては、乙の担当者と甲の学芸員が行い、充分な状況把握を行う。
 - (2) 集荷・返却時における作品の安全確保については、専門業者が作業を行い、甲の学芸員と乙の担当者が現場立会いを行うことにより確保する。
 - (3) 出品作品が取蔵庫から搬出される時から、展覧会の終了後に取蔵庫に搬入される時までの管理責任は乙が負うものとする。
 - (4) 上記3の委託業務の実施にあたり、関係法令上措置しなければならない事項は、すべて乙が事前に行うこと。
- 8 展覧会に伴う収入の扱い
展覧会に関して収入が発生した場合、すべて乙に帰属する。
- 9 疑義の処理
この覚書に定めのない事項、又は疑義が生じた事項については、甲乙が誠意を持って協議し、解決を図るものとする。

資料3 展覧会チラシ (A4)

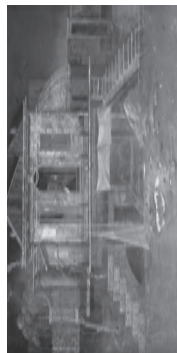
ぼくらの視点×あなたの出会い
 一高校生学芸員による企画展覧会—
2009.10.14wed-17sat
 AM10:00～PM18:00
 イーグレひめじ 特別展示室
 入場無料

作品鑑賞風景

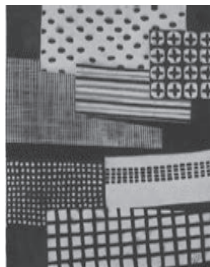
この展覧会は、ぼくたち高校生が自分たちの感性だけで、つまり「ファーストインプレッション」によって、直感的に選んだ姫路市立美術館所蔵の作品を展示しています。あえて、この展覧会では、作者の名前や、時代背景、価値にはこだわらず選びました。そして、作者が何を考え、何を伝えたいのか想像をめぐらせ、自分なりにその作品と本気で向き合いました。私たち高校生側、指導者側の“2つの視点”をより感じとっていただけたら幸いです。そこにもた、あなたの視点を足していただくことでさらにこの展覧会が遠き深いものになるでしょう。あなたも僕たちの議論の中へ参加してみませんか。



野村正 白ウサギ



保田浩 白ウサギ



上野長雄 白ウサギ

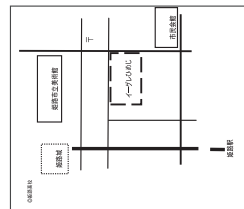
出品作品： 姫路市立美術館の所蔵作品より12点

主催： 第46回全国高等学校美術、工芸教育研究大会
 <2009兵庫大会>実行委員会

協力： 姫路市立美術館

会場： イーグレひめじ 特別展示室 (姫路市本町68-290)

お問い合わせ 姫路市立姫路高等学校 (前野) TEL 079(297)2753



資料4 アンケート集計結果

回答数：58

性別	
男	50.0%
女	50.0%
総計	100.0%

年齢	
不明	1.7%
10代	22.4%
20代	10.3%
30代	8.6%
40代	15.5%
50代	17.2%
60代	20.7%
70以上	3.4%
総計	100.0%

住所	
不明	5.2%
姫路市	56.9%
神戸市	5.2%
大阪府	1.7%
尼崎市	1.7%
明石市	3.4%
その他県内	6.9%
佐用郡	1.7%
その他県外	12.1%
加古川市	5.2%
総計	100.0%

展覧会の感想	
不明	1.7%
大変良かった	55.2%
良かった	39.7%
普通	3.4%
総計	100.0%

告知媒体	
チラシ	19.0%
その他のポスター	6.9%
人から聞いて	5.2%
ホームページを見て	3.4%
学校のポスター	6.9%
その他雑誌	5.2%
複数回答	1.7%
たまたま今日来たら	8.6%
先生・友達から聞いて	25.9%
美術館のポスター	6.9%
以前から	5.2%
関係者	1.7%
学校授業	1.7%
総計	100.0%

交通手段	
不明	8.6%
J R→徒歩	39.7%
山電→徒歩	3.4%
自動車	19.0%
自転車	12.1%
徒歩	10.3%
バス	6.9%
総計	100.0%

今後の予定	
不明	37.9%
姫路城	3.4%
その他	29.3%
美術館	15.5%
この展覧会のみ	13.8%
総計	100.0%

作品解説の同 時展示の感想	
大変よかった	55.2%
よかった	36.2%
普通	5.2%
やや不満	1.7%
不満	0.0%
未記入	1.7%
総計	100.0%

教育関係者の 感想	
参考になった	34.5%
参考にならなかった	3.4%
その他	0.0%
未記入	62.1%
総計	100.0%

2009兵庫大会 参加について	
参加者	19.0%
その他一般	34.5%
未記入	46.5%
総計	100.0%

姫路市立美術館 研究紀要 第10号

平成22(2010)年3月発行

発 行 姫路市立美術館
兵庫県姫路市本町68-25
tel.079-222-2288

印 刷 所 小野高速印刷株式会社
姫路市平野町62